埋文とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2026.3.31
VOL. 174

加納南10号墳出土品（氷見市加納）
《乳文鏡》

鏡は光を跳ね返すことから、古墳時代の人々は悪いものを避ける（辟邪）ものと考えていたのではないかと推測されています。写真は1枚の鏡の表と裏です。右側がものを映す鏡面、左側は文様がある鏡背です。文様にはいろいろなバリエーションがあるため、博物館では鏡背側を見せて展示しています。鏡背の中心には大きな突起（鈕）があり、これには紐を通すためと考えられる孔があります。写真の乳文鏡は日本で造られたもので、鈕を取り囲む7個の小さな突起（乳）が特徴です。

とっておき埋文講座①●県営･国営農地整備事業に先立つ試掘調査
②●ボランティア活動紹介
③●とやま出身研究者の民族考古学事始 ～カゴ作りと機織を中心に～
Center Flash●催しガイド２０２６
古写真発掘！●神明原Ａ遺跡　南砺市土生新

富山県埋蔵文化財センター

県営・国営農地整備事業に先立つ試掘調査

とっておき埋文講座①

はじめに

富山県では富山市水橋地区で平成27年度から県営事業、平成29年度からは国営事業として、農地整理事業（ほ場整備）が進められてきました。富山県埋蔵文化財センターでは、事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）についての試掘調査を、平成28年度から継続して実施してきました。10年目となる令和7年秋の調査をもって、水橋地区でのほ場整備に先立つ試掘調査はひとつの節目を迎えました。

ほ場整備と埋蔵文化財

ほ場整備が計画された水橋地区周辺は遺跡が数多くあることでも知られた地区です。当センターでは、赤色の国営事業に伴う20遺跡、紫色の県営事業に伴う14遺跡の合計34遺跡について、遺跡の状態を確認するための試掘調査を実施してきました。試掘調査の成果については「報告書」として、令和2年度から毎年1冊ずつ刊行してきました。令和8年3月に水橋地区最後の7冊目を刊行することができました。

試掘調査のその後

試掘調査の結果得られた遺物包含層や遺構検出面などの高さのデータは、水田の高さや水路の設計に反映されます。設計をもとに遺跡が壊されることがないよう、調整されます。この調整協議の結果、工法や位置、高さなどが変更されることもあります。変更できない場合や、遺跡を保護する土の厚さが少ない場合などは、工事現場に立ち会い、確認しながら工事を進めます。

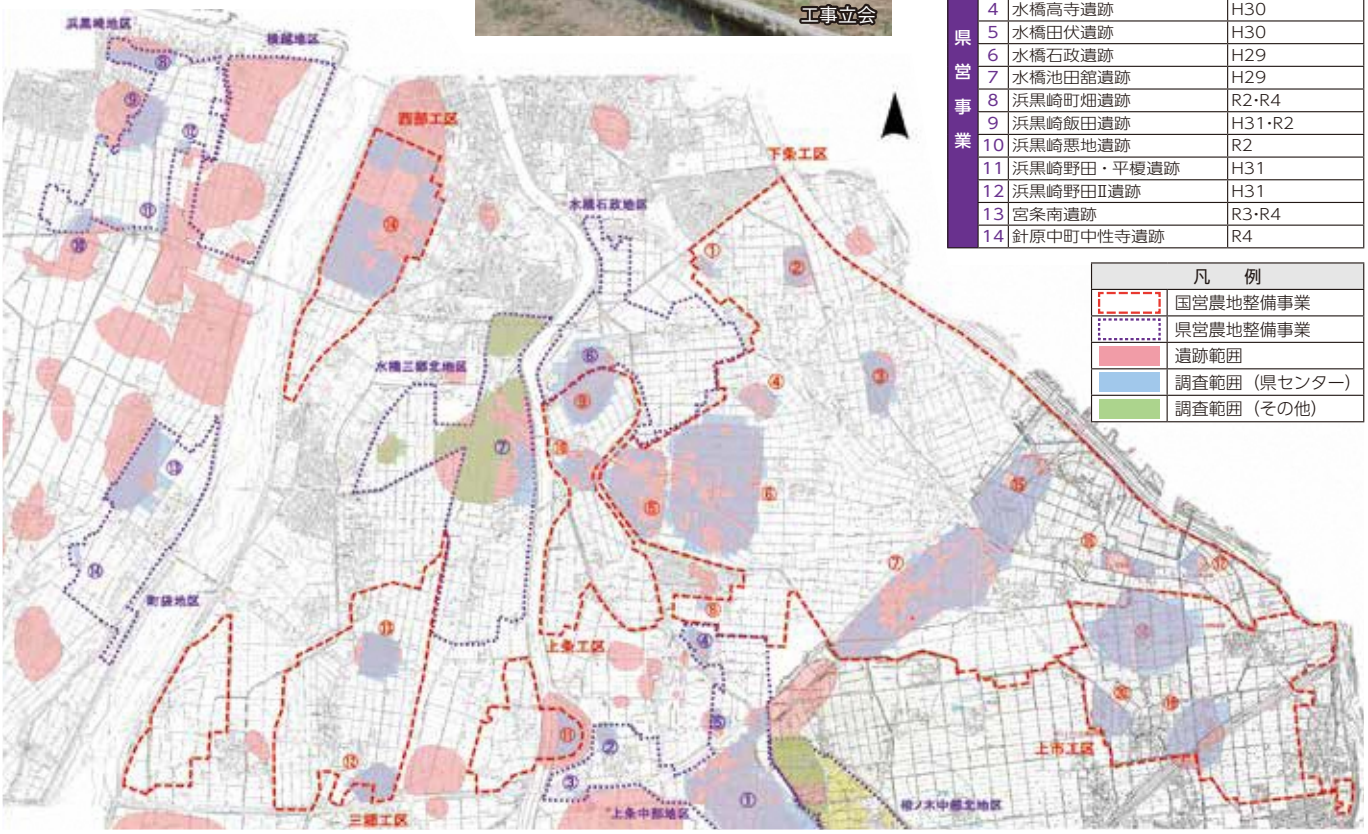
それでも工事によって遺跡が壊されることが避けられない場合、例えば、新しく大きな水路を作る場合などは事前に発掘調査をして記録に残します。令和7年度には、水橋小出遺跡で、試掘調査と並行して水路にあたる部分の本調査が実施されました。

工事立会

おわりに

水橋地区での試掘調査は10年という年月をかけ、ひとまず区切りとなりますが、これからは試掘結果をもとに調整協議が行われます。埋蔵文化財、地域の歴史と開発のバランスをとる日々が始まります。試掘調査という地味な仕事にも、興味を持っていただければ嬉しく思います。　（金三津道子）

		対象遺跡	調査年度
国営事業	1	水橋開発町遺跡	H29
	2	水橋狐塚遺跡	H29･H30
	3	水橋小池遺跡	H30
	4	水橋恋塚遺跡	H31
	5	小出城跡	H30･H31
	6	水橋小出遺跡	H30･H31･R2･R6･R7
	7	水橋上砂小坂・下砂子坂遺跡	H30･R5･R6･R7
	8	水橋専光寺遺跡	H30
	9	水橋石政遺跡	H29･H30
	10	水橋大正遺跡	H31
	11	金尾遺跡	R4
	12	中野遺跡	R5
	13	水橋的場遺跡	R5
	14	水橋荒町・辻ケ堂遺跡	R2･R3･R4
	15	砂子坂遺跡	R5･R6
	16	石仏遺跡	R5
	17	石仏嶋町遺跡	R4
	18	大永田西遺跡	R4･R5･R6
	19	東江上遺跡	R3
	20	東江上西三反田遺跡	R3
県営事業	1	田伏・佐野竹遺跡	H28･H29･H30
	2	水橋北馬場遺跡	H30
	3	水橋金広・中馬場遺跡	H30
	4	水橋高寺遺跡	H30
	5	水橋田伏遺跡	H30
	6	水橋石政遺跡	H29
	7	水橋池田舘遺跡	H29
	8	浜黒崎町畑遺跡	R2･R4
	9	浜黒崎飯田遺跡	H31･R2
	10	浜黒崎悪地遺跡	R2
	11	浜黒崎野田・平榎遺跡	H31
	12	浜黒崎野田Ⅱ遺跡	H31
	13	宮条南遺跡	R3･R4
	14	針原中町中性寺遺跡	R4



試掘調査対象遺跡の位置

ボランティア活動紹介

とっておき埋文講座②

はじめに

富山県埋蔵文化財センターボランティアは、平成15年に発足し、今年で22年目を迎えました。現在の登録者数は21名です。

活動目的は、来館者や周囲の人々へ埋蔵文化財や考古学の面白さをPRし、富山県の歴史・文化への理解を深めてもらうことです。そのためにはまず、ボランティアさん自身が「考古学ってオモシロイ!」と感じることが必要です。ボランティアさんは当センターが実施する研修会に積極的に参加して考古学や歴史を学び、様々な体験活動を通じて理解を深めています。そして考古学の面白さを、子供達をはじめとする多くの県民に伝えています。ボランティアさんの活動の様子を紹介します。

来館学習・出前授業のサポート

小中学校やPTA親子活動等の歴史学習や体験活動をサポートします。勾玉づくりや火起こし体験、土器に触れる体験が人気です。

出前授業のサポート

勾玉づくり補助

夏休み親子体験教室のサポート

夏休み期間中の親子（小学4～6年生）を対象とした体験教室で、刀鍛冶、鏡の鋳造、クルミ垂飾、藍染め、縄ストラップ、大型勾玉づくり等の難易度の高い作業を補助します。中には火や刃物等を使う危険な工程もあるため、ボランティアさんの目配りが我々職員の大きな助けとなっています。

考古学少年団のサポート

小学6年生～中学3年生が所属し、考古学を詳しく学んでいます。土器や石器の図面を書くなど専門的な活動もあり、ボランティアさんも一緒に学んでいます。遺跡探訪では団員の安全にも配慮していただいています。

遺跡探訪

遺跡見学会

県内の発掘調査現場で遺跡を見学し、調査担当者の解説を聞きました。

遺跡見学会（富山市栗山A遺跡）

出土品の洗浄

発掘調査等で出土した土器や石器の洗浄作業です。1点ずつ注意深く洗う根気のいる作業です。

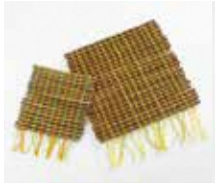
出土品の洗浄

新規教材開発

考古学を楽しく学べる体験メニューを考えています。先に紹介したクルミ垂飾と縄ストラップづくりはボランティアで開発したものです。この他、綿の糸紡ぎ、カラムシの苧引（おび）き、貝輪づくり、自然木のアンギン編み、草木染め、漆塗り竪櫛づくりなど、楽しみながら試作しています。

クルミ垂飾

縄ストラップ


自然木のアンギン編み

漆塗り竪櫛

MAIBUN小竹貝塚研究プロジェクトへの参画

小竹貝塚は富山県が誇る第一級の考古資料の宝庫で、解明すべき多くのデータが今なお眠っています。本プロジェクトでは、外部研究者、所員、ボランティアさんが様々な視点から多角的に迫り、研究成果を発信しています。今年はパイプ状ベンガラの焼成実験を行い、“縄文の赤”再現を目指しました。

ベンガラ焼成実験

この他、研修会での展示解説学習や各種体験活動の実践などで理解を深めています。詳しくはホールに掲示している「ボランティア通信」をご覧ください。興味を持たれた方は、ぜひ来年度のボランティアにお申し込みください。お待ちしています。　（朝田亜紀子）

展示解説学習

とやま出身研究者の民族考古学事始 ～カゴ作りと機織を中心に～

とっておき埋文講座③

金沢大学資料館 特任助教　松永　篤知

はじめに

「考古学（archaeology）」とは、発掘調査によって得られた物的証拠（遺跡・遺構・遺物）に基づいて過去の人々の営みを明らかにする学問です。しかし、遺跡から見つかるのはいずれも静的なモノで、それだけで過去の生活を復元するのには限界があります。

それを補い、動的なイメージを描き出す方法の一つが、「民族考古学」です。伝統的な暮らしを続ける人々を観察・記録し、そこで得た知見をリアルな生活復元に活かすのです。

今回の講座では、とやま出身（富山市出身、上市町生まれ）の考古学研究者である私が、近年東南アジアで実施している民族考古学的調査についてご紹介します（※当日の講演に一部補足）。

今年度の富山県埋蔵文化財センターの特別展は「とやま歴史万博」とのこと、2025年は万博イヤーですし、私の講座もこの特別展や万博に少しでも絡めるようなお話にできればと思います。

民族考古学的調査の様子

1. 民族考古学とは

（1）民俗考古学と民族考古学

私の調査のお話をする前に、民族考古学という学問について、もう少し詳しく説明したいと思います。紛らわしいことに、同じ音の「民俗考古学」という学問もあります。それぞれのベースとなるのが、民族学と民俗学です。

まず、「民俗学（folklore studies／folkloristics）」というのは、ざっくり言えば国内の生活文化や伝承を聞き取り調査等によって研究する学問のことです。我々にとっては、日本の生活文化や伝承を調査・研究する学問ということですね。一方、「民族学（ethnology）」は、世界の諸民族の生活文化等を観察・記録し研究する学問を指します。「文化人類学（cultural anthropology）」とも呼ばれ、調査対象のところに研究者自ら実際に入り込んで観察する「参与観察」が特に重要な手法に位置付けられます。民俗学、民族学、文化人類学、それぞれの専門家にとってはこんな単純に説明できるものではありませんが、この講座ではこれくらいの理解で受け止めていただければと思います。

そして、考古学の発掘調査で得られた遺構や遺物の解釈に、それぞれの記録である民俗誌（folklore）や民族誌（ethnography）を援用することで、よりリアルなイメージを持った生活復元が可能になることが期待されるわけです。前者を援用するのが「民俗考古学（folklore archeology）」で、後者を援用するのが「民族考古学（ethnoarchaeology）」ということになります。

なお、今回のテーマは民族考古学ですが、もちろん民俗考古学も非常に重要です。私自身、越後アンギンと縄文編布（あんぎん）、威嚇猟法（いかくりょうほう）の道具と環状樹皮製品、嬰児籠（えじこ）と巻き上げ編みカゴといったように、国内の民俗事例を縄文時代や弥生時代の考古資料を理解する際の参考にすることも多いです。

（2）考古学史における民族考古学の成立と展開

さて、民族考古学は、長きにわたる考古学の歴史において、どのように成立したのでしょうか。

1960年代、アメリカでビンフォード（Lewis R.Binford）という考古学研究者がニューアーケオロジー（New Archaeology）・プロセス考古学（processual archaeology）を展開しました。そこで提唱されたのが、中範囲理論（middle-range theory）という考え方です。これは、考古学的事実を現在から過去へ、静態から動態へ変換する方法論体系で、考古資料と人類の行動をつなぐ「橋渡し」の理論を指します。民族考古学はその一環として登場し、他には歴史考古学（historical archaeology）や実験考古学（experimental archaeology）があります。そしてビンフォードは、アラスカをはじめとする各地で民族考古学的調査を実施しました。

それから、ビンフォードの教えを受けたロングエーカー（William A. Longacre）がさらなる民族考古学的研究を推し進めました。具体的には、フィリピンのルソン島をフィールドとしたカリンガ民族考古学が知られます。また、1970年代以降にポストプロセス考古学（post-processual archaeology）を掲げた英国のイアン・ホッダー（Ian Hodder）も、異なる立場で民族考古学的研究を行いました。

このように米英で成立・展開した民族考古学を学んだ者の中には、日本人研究者もいます。北陸地方では、ロングエーカーの弟子にあたる小林正史（まさし）北陸学院大学名誉教授・金沢大学古代文明・文化資源学研究所客員教授が有名で、現在も東南アジア各国で民族考古学的調査を精力的に実施しています。その成果の一部が、今回の特別展（弥生時代の米調理）にも反映されています。

2. 東南アジアにおける民族考古学的調査

民族考古学の説明が長くなってしまいましたが、ここからは私の民族考古学的調査について具体的にご紹介します。私は元々、北陸地方の考古学が専門ですが、母校であり現在の職場で

民族考古学的調査の訪問地の位置図（●：訪問地）

もある金沢大学が「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」を掲げ、海外での研究活動を重視しているため、以前から中国や台湾でも考古資料の調査・研究をしていました。その流れで、さらに活動範囲を広げ、近年は前述の小林先生のご指導も受けながら東南アジアで民族考古学的調査を進めているというわけです。158の国・地域が参加した大阪・関西万博には到底及びませんが、私が訪問した3つの国について順に見て行きましょう。

(1) タイ王国

2022～2025年にかけて、タイ北部に暮らす山地民のラフ（Lahu）族・アカ（Akha）族・モン（Hmong）族・カレン（Karen）族・ダラアン（Dara-ang）族の村々を訪ねました。

タイ北部の山地民たちは、元々焼畑農耕を主としていていましたが、タイ政府が焼畑禁止策を推し進めたため、

タイ・ラフ族のシャーマンの家

現在は水稲農耕等への移行が進んでいます。彼らの主食は米です。信仰は、それぞれ精霊を信じるアニミズムを基本としていますが、村や民族によってはキリスト教や仏教も広がっています。

私がこれまでに最も多く訪ねているのはラフ族の村ですが、各村には儀礼を司るシャーマンがおり、シャーマンだけは伝統的な草葺き屋根の高床掘立柱建物に住んでいます。他の村人の家も高床掘立柱建物ですが、屋根はトタンやスレートです。村の中央には竹垣で囲まれた儀礼用の円形ダンス場があり、私も儀礼に参加させてもらいました。米は竹を編んだフタとサナ（蒸気を通す簀子の類）が付く甑（蒸し器）で蒸して調理しており、手でいただきます。村中でイヌ・ネコ・ニワトリ・ブタ・スイギュウが飼われていて、儀礼の際にはブタを殺して供します。

(2) インドネシア共和国

2024年に、ジャワ島西部の山地に暮らすスンダ（Sunda）族の伝統的共同体であるカセプハン（Kasepuhan）の村を訪問しました。村の始まりは、なんと1368年に遡るとされ、「王」アバ（abah）が指導的立場として頂点に立ています。

この村では、水稲農耕や焼畑農耕を行い、米を主食とする暮らしをしています。ネズミ返しの付いた高床の穀倉が何棟も並ぶ様子は壮観です。また、水をはった棚田には魚がいて、「魚米の郷」を彷彿とさせるものがありました。なお、信仰は、イスラム教に改宗していますが、伝統的なアニミズムの部分も残っています。

アバの住居と集会所が連なる中心的建物では、男性の見張り付きでずっと火を絶やさないカマドを使い、女性たちが大量の米調理をしています。また、村内の杵つき小屋では、女性たちが竪杵・臼を使ってリズミカルに作業をしている様子を見かけました。

この村ではイヌ・ネコ・ニワトリを多く見かけましたが、ムスリムなので当然ブタは一頭もいませんでした。

(3) フィリピン共和国

2025年に、ルソン島北部の山地に暮らすカリンガ（Kalinga）族の村々を訪問しました。ロングエーカーの調査対象だった人々です。かつては首狩り族であり、独自の平和協定ボドン（Bodong）が特徴的です。また、伝統的な刺青文化やスローフードでも知られています。

その暮らしは、米を主食として、水稲農耕や焼畑農耕を行っています。滞在先の家では、弥生時代に通じる湯取り法炊飯も見せてもらいました。棚田には出作り小屋が設けられ、村人たちが農作業をする際に利用しています。信仰は、アニミズムからキリスト教に改宗していて、各村に教会があります。

各村には、イヌ・ニワトリ・ブタ・スイギュウがいましたが、ネコはほとんどいませんでした。そのせいもあってか、ネズミ返しの板が付かない高床の穀倉の中に子ネズミがいました。逆に言えば、ネコとネズミ返しはネズミ対策に有効ということですね。

3. 東南アジア民族誌の日本考古学への適用

このように、ここ数年の間に東南アジア各国の村々を訪ね、それぞれの暮らしを見てきました。そして、それらの中に、過去の日本列島の暮らしを想起させるものがいくつも見られたのです。本講座の副題にもあるように、カゴ作りと機織を中心にご紹介します。

(1) カゴ作り

タイ・インドネシア・フィリピン各国で様々な編物（カゴ・甑・箕等）の製作過程や使用方法を詳細に観察・記録しました。すると、弥生時代・古墳時代以降の編物との共通点・相違点が確認でき、大いに注目されます。

タイ・ラフ族のカゴ（製作途中）

たとえば、各民族のカゴを見ると、弥生時代のものに似ています。東南アジアの編物は竹（特に熱帯性タケ類）や藤（ラタン）を素材とする点で日本列島とは異なるのですが、編み方のパターンや形は弥生時代の西日本を中心に定型化するカゴに近いのです。底部を網代編みにして、そこから側面を立ち上げながら編み進めていく様子は、まさに弥生時代のカゴ作りと同じです。

一方、奄美以南を除く日本列島の箕（穀物選別用の浅い編物）は、弥生時代以来、ちりとりのような形の片口箕ですが、東南アジアの箕は円形の丸箕が基本で、使用する動きも片口箕とは違います。なお、カリンガ族では方形の角箕を使い、片口箕に近い動きをします。

インドネシア・スンダ族の丸箕

これら考古資料・民族資料の共通点は本質的で不変の要素、相違点は環境等に左右される要素ではないかと推察しますが、具体的かつ詳細な要因は今後詳しく追究していく必要があります。

(2) 機織

機織については、タイとフィリピンで腰機（原始機）を使用している状況を確認しました。日本列島では弥生時代に機織が始まったと考えられますが、そのあり方を考える上で重要な手がかりとなり得ます。タイでもフィリピンでも、腰で経糸にテンションをかけ、刀形の木製品で緯糸を打ち詰めていました。

タイ・カレン族の腰機

ただし、私が現地で確認したのは、現在弥生時代の腰機について主に想定されている「輪状式」（布が輪っか状に織り上げられる方式）とは異なる「直状式」（布が長方形に織り上げられる方式）のものばかりだったため、その点では注意が必要です。

フィリピン・カリンガ族の腰機

(3) その他

カゴ・機織以外にも、各国で弥生時代・古墳時代以降の暮らしの参考となるような生活風景や生活道具を数多く観察・記録しました。

タイ・アカ族の鳥形付き精霊の門

村人みんな（結）で一気に建て替える高床の掘立柱建物、甑を使った米調理、門に取り付けられる鳥形木製品、稲を穂摘みするための収穫具や稲架、脱穀等に使う竪杵と臼のセット、木材に刻みを入れた梯子、ドングリ形の木製独楽など、日本列島と全く同じとまでは言えなくとも、過去の人々の生活復元をする上で、民族誌から学ぶところは多いです。今回の特別展でも民族資料に似た竪杵・臼、稲収穫具、米調理用土器が展示されていたように、とやまの考古資料にも適用可能です。

インドネシア・スンダ族の稲架

おわりに

2022年に初めてタイ北部を訪ねて以来、調査のたびに新たな発見と驚きがあります。やはり、ふだん現代文明にどっぷり浸っている状態で過去の生活を考えても、不十分な復元しかできません。その点で、民族考古学は、我々が過去の人々の暮らしをより深く理解するために有効な手段の一つであると言えるでしょう。

もちろん、民族誌を単純に真に受けたり、都合よく拡大解釈したりすることは禁物ですが、インターネットやスマートフォンの普及によって世界の諸民族の生活・文化が急速に変化している中、今のうちに各地の伝統的な暮らしを観察・記録することが急務です。

今回「事始」と題したように、私の民族考古学的研究はまだ始まったばかりです。私の母方のルーツは上市町の早月川最上流域旧集落「伊折」であり、自分の中に流れるとやまの山の民の血を誇りに思いながら、今後より一層、研究を進めていきたいと思っています。

（令和7年11月16日
第4回 考古学講座）

Center Flash

催しガイド 2026

展示室

企画展「見て、知って! とやまヒストリー 2026」

令和8年4月17日(金)～9月24日(木)

富山県の旧石器時代から近現代までの通史について、県内各地で発掘調査された出土品を通して分かりやすく紹介します。
展示を見て楽しく歴史を学びましょう。社会科の学習にもご活用ください。

縄文土器
【上久津呂中屋遺跡】

小竹貝塚28号人骨と複顔

特別展「富山県からのお知らせ　転入転出 ―富山県民を作り上げた人たちの足跡―（仮）」

令和8年10月9日(金)～令和9年1月31日(日)

各時代の考古資料から「トヤマ」に生きた人々の動きを想像し、私たち富山県民のルーツを探ります。

縄文土器【境A遺跡】

ミニ企画「市町村連携発掘速報展」「春の虫干会（むしぼしえ）―重要文化財の風通し―」

令和9年2月6日(土)～4月4日(日) 予定

県内で近年実施した発掘調査の出土品や研究成果を展示します。
また、当センターが所蔵する国重要文化財「境A遺跡出土品」や登録有形文化財などの定期点検を兼ねて、風通しの様子を公開します。

収蔵展示室

常設展示「小竹貝塚展」

日本海側最大級の貝塚で、縄文時代前期という古い時代の埋葬人骨が、91体出土しました。土器や石器のほか、木器や骨角器など多くの出土品を展示しています。併せて平成30年度から開始した「MAIBUN 小竹貝塚研究プロジェクト」の最新成果も公開しています。

骨角器【小竹貝塚】

県民考古学講座

考古学の入門から近年の発掘調査成果まで、当センターの職員のほか、著名な講師を迎え、分かりやすく解説する講座です。
令和8年度は、7月より全6回の開催を予定しています。

考古学少年団

対象：県内の小学6年生～中学3年生

考古学の簡単な解説や体験活動を通して、富山の遺跡・出土品や歴史を、考古学の専門家の指導で楽しく学ぶことを目指しています。考古学を学んでみたい方、本物の土器や石器に触れてみたい方、団員になってみませんか。　〈年間10回程度開催〉

とやま歴史万博

もし○○がなかったら、私たちの暮らしはどうなるでしょう

みんなの考え

みんな ありがとう!
現代館案内人
ソバソバ

旧石器　もし「**刃物**」がなかったら
- 大きい食べ物が喉に詰まる可能性があがる（特に餅）
- 全てコブシで解決する

縄文　もし「**土器**」がなかったら
- 皿になりそうな大きな葉っぱをつける木をたくさん育てそう。南国の木?
- どきどき♡しなくなる

弥生　もし「**米**」がなかったら
- 米が無ければ麦を食べたらいいでしょう♪
- 肉食べろ　にく にく にく

古墳　もし「**大きな墓**」を作らなければならなかったら
- 就職先が大きな墓作り職人!
- 私は墓を作る人だろうから、大変だけ…

古代　もし「**文字**」がなかったら
- 見つめあう　微笑む　手をつなぐ
- 勉強しろって言われなくなる

中近世　もし「**やきもの**」がなかったら
- ひょうたんと竹で皿を作ったかも…
- 全部手でたべる

古写真発掘！―《28》

神明原A遺跡（しんめいばらえー）

昭和51年（1976年）撮影　　南砺市土生新（はぶしん）

南砺市の南西部に位置する旧福光町・城端町に広がる標高約120m～260mの立野ヶ原台地で「県営立野ヶ原地区総合パイロット事業」が計画され、昭和47(1972)年～昭和52(1977)年の実に6年間にわたり100箇所以上の遺跡が調査されました。(『埋文とやま』VOL.88・144号に関連記事があります。)

神明原A遺跡もその内の一つで、昭和51(1976)年の第5次調査で発掘調査が行われました。調査では、県内では稀な縄文時代早期の住居跡が見つかりました。貴重な例ということで、住居跡は盛土保存したと記録されています。

上の写真は、その住居跡です。下の写真は住居跡を保存するために埋め戻しているところです。1976年9月4日と記録されており、まだ日差しの強い時期、作業員の皆さんが被っているのは福岡町名産の「菅笠」と思われます。

縄文時代早期の極楽寺式土器
（底部は出土していません。）

編集後記

先日、遅ればせながら映画「国宝」を観てきました。歌舞伎の舞台って横からみると面白いとか、昭和ってこんな生活していたなあと思っていたら、あっという間の3時間でした。そうは言っても3時間。ふかふかのシートに座っていたのにお尻はしっかり痛くなりました。　（担当　青山）

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」VOL.174

令和8年3月31日発行　編集／富山県埋蔵文化財センター　〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL076-434-2814

URL https://www.pref.toyama.jp/3041/miryokukankou/bunka/bunkazai/maibun/index.html

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

富山県